

特別展

帰ってきた ごんぎつね

— 知多の自然と南吉文学 —

愛知県知多半島に生まれ育った新美南吉は、故郷を舞台とし、そこに暮らす人々の生活の中から物語を紡ぎました。その作品には、子ども時代に遊び、大人になってからも見つめ続けた郷土の自然がじつによく描かれています。

海に囲まれた知多半島は、その大部分が丘陵地で占められ、大きな河川や広い平野はほとんど見られません。その制約された環境のなか、森林の破壊と保護を繰り返しながら、二次林や溜池など人間の営みと密接に関わる、いわゆる里山の生態系がつくられてきました。南吉の代表作「ごんぎつね」もまた、そうした里山を舞台に、キツネという古来から人間と特別な関係を結んできた生き物を主人公に書かれています。

キツネ以外にも野鳥、ホタル、ヒガンバナなど、様々な生き物や植物が南吉作品に登場しますが、その多くが農業など人間の営みと深い関わりを持っています。

今年10月、名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開かれます。これを記念し、今回の特別展では、知多半島の自然と南吉文学の関わりについて、人々の暮らしと生物多様性の視点からご紹介いたします。



ウグイス(撮影:三浦 皓)



キツネの親子 2010年5月・知多市にて
(撮影:竹内荘一)



ヘイケボタル(阿久比町提供)



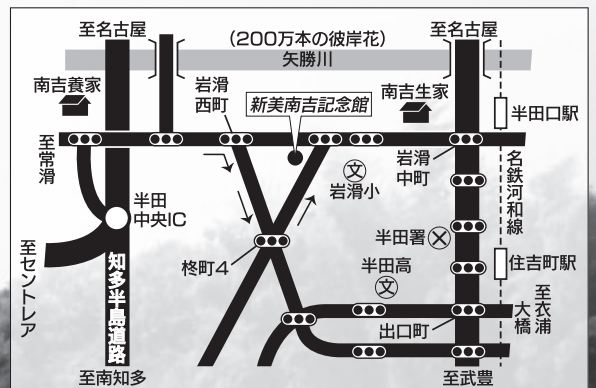
草稿「権狐」

地球のいのち・交流ステーション事業

とき 10/16(土) > 17(日)

場所 愛・地球博記念公園
(地球市民交流センター)

COP10関連イベントに特別展のダイジェスト版パネル展示と貝殻笛づくりで参加します!



新美南吉記念館